

花 山 だ よ り (七月)

天文臺には二匹の飼犬が居る。大きい方を「クロ」、小さい方を「シロ」と云ふ。蓋し、毛並の黒白を以つて其の Namen を附せるが如し。所が去る七月二日の午の刻、此の小さい方の「シロ」が、何を思つてか「フー」と山を下り、蹴上迄行つたは良いが、京津國道を疾走する1929年型フォードのボロ自動車と、アッと云ふ間もあらばこそ、ドカンとブツかつて、クラッシュと目が眩らみ、ドタンとヒックリ返つて、其まゝ犬死にしました。此れは一大事と早速遺骸を蜜柑箱にプチ込んで、山へ歸へり、林の中に穴を掘つて、いと鄭重に葬りました。それから、山の諸先生一同御参列の上、嚴かなる御葬式を営み一同深く頭を垂れて、南無阿彌陀佛を唱へて、南無妙法蓮華經と返し、高マノ原を唸つて、讃美歌を合唱し、最後に一同送葬曲を奏でました。「天文臺葬」です。東郷元帥の國葬もかくやと僥はれて、轉た感懷に堪へなかつたです。もつとも、中には何も念佛を唱へなかつた人もありました。無宗教の仁にして、「生は即ち生くる事なり。死は即ち死る事なり、星は即ち太陽に異ならず」なんて、威張つて居る奴は、たゞムニヤムニヤと云ひました。もつとヒドいのは、遙かに空を仰いで「イ、天氣やナァ」云ひました。だからイケないのです。畜生と云へども靈魂は不滅、犬罰テキ面にきいて、七月六日の早朝花山定期バスは「シロ」往生の名所、「蹴上」にて、1929年型ボロタキシと正面衝突をなし、搭乗者五名、重輕傷を負ひました。重傷者は唇を切り、傷持つ身の如何ともなし難く、半日天文臺で寝て居ました。越えて七月十二日、又もや定期バスは、國道花山道路入口にて、京阪大型バスに追突され、膽玉が飛び上りました。幸ひ怪俄人はありませんでしたが、天文臺バスはボディをツブされて、損害十五圓を蒙りました。其他、七月上旬には、彗星搜索望遠鏡のハンドルが破損したり、時計室の水銀保温寒暖計が故障を起したりして、犬罰と云へども馬鹿にならず、犬が馬や鹿になつてはたまらんと云ふ事がハツキリ解かりました。讀者諸子よ、夢々犬を、粗ろそかにし給ふな。私は、毎夜、大犬星座と小犬星座とそれから獵犬星座とを拜んで居ます。

近畿防空演習下に於ける花山——稻葉先生は、去る七月十五日より三週間の豫定で、廣島電信隊に召集されましたので、七月十日付辭令で、花山天文臺防空司令官には、公文工兵少尉殿が任官されました。七月二十六日の演習

第一日には、朝より、花山防護團の活躍目ざましく、暗雲低く垂れて今にも雨が降りさうなのに拘らず、大ドームのスリットを、十三ミリメートル程開けて、大望遠鏡を振り廻し、懸命に敵機を捜し求めましたが、不幸、何物をも発見出来ず、たゞ見える物は、雨雲の水滴とレンズの塵とのみでした。勿論、敵機を発見しても其れ迄で、如何とも爲す能はず、天文臺には高射砲は申すに及ばず、一臺の機關銃すらなく、テニスのボールが三個と野球のボールが二個あるのみである。敵機が来れば、たゞ指を喰へて眺めて居るか、せいぜい「馬鹿野郎」とドナる位が關の山です。此れを察してか、さすがに敵もさるもの、二十六日の十五時頃、遙か西方に一點機影を現はした敵の輕爆機、見る々々中に高度を下げ、千百米―千米―八百米―六百米と下降したかと思ふと、急に清水山の西方に於いて、突如、發動機をピタリと止め、そのまゝ稚兒ヶ池を飛び越えて天文臺へ突入して來た。スハ―一大事と思ふ間もなく、大ドームの上空僅か五十米の點をかすめて、徐ろに旋回せず、突如、天文臺の玄關口に多量の灰を撒き散らしました。多分皆んな「ワァー」と云ひました。急に發動機の音がして、誰か「馬鹿野郎」と云つた時には、敵輕爆機は、遙か東方の天津の上空に飛び去つた後でした。其夜は惡憎の雨で、敵機は愚ろか、大事な月蝕さへも見えませんでした。演習第二日、七月二十七日夜の燈火管制。天文臺は全部消燈。たゞ本館西入口の内部廊下と宿舍の食堂とだけに、黒布に覆はれた電燈が、かすかに、ついて居ます。大ドームのテツペンに上ると京都の北部、西部、南部大阪方面及び山科全部の燈火管制振りがよく觀察出來ます。さすがに京都は立派な管制振りで、花山の防空司令官も、いと満足に思ひましたが、たゞ一つ、山科方面にある某大工場（特に名を祕す）の消燈が、いさゝか遅い。工場は自らサイレンを鳴らし自ら消燈するので大變都合は好いが、それだけ山から見て氣にかかる。かかる所は、自ら進んで一足先に消燈すべきだと思ふ。BK アナウンサーを眞似て「若し日本を愛する心が有るならば、其の火を消して下さい」と呼びましたが、惜しくも、半分程叫んだ時に、工場の燈が消えてしまつたので、返す返すも残念でした。ともかく、花山に高射砲一臺機關銃二臺あれば、舊京都市内には東より敵機を入れない自信があると、皆んな云つて居ましたつけ。（花山子）